

巻頭言

メディアセンター長
立教大学理学部 教授 平山孝人

2021年4月にメディアセンター長に就任して1年が経ちました。私は2011年4月～2015年3月にもメディアセンター長をしていたので、「出戻り」となります。1回目のセンター長に就任する直前（2011年3月）に東日本大震災が起き、大学の授業開始が1ヶ月遅れました。メディアセンターの仕事にかかわり始めたばかりの私は何もできませんでしたが、当時の宮内課長を中心とした職員や業者の皆さんの八面六臂の活躍で無事乗り切ることができました。休講となった1ヶ月の間はホームページや当時使っていたLMSのCHORUSを用いた課題等に対応しましたが、V-Campus (Virtual Campus) の必要性が現実のものとして目の前に現れた初めての機会ではなかったかと思えます。

2020年初頭から始まったコロナ感染症の拡大は、全ての教育機関に大きな影響がありました。立教大学においてはオンラインにおいても対面と同レベルの教育ができるように、Google Meet/Zoomのライセンスを全大学構成員用に用意するなど様々な努力をしました。また、メディアセンターではオンライン授業のやり方のマニュアル・ヘルプを充実させ、大学教育開発・支援センターと協力しながら、教育の質の担保に向けたノウハウの共有をしてきました。私も一教員としてこれらの情報には大変助けられました。2020年度秋学期からは一部対面授業も再開できるようになりましたが、日本に入国できない留学生や基礎疾患を持つ学生に対応するために、多くの授業で対面+オンラインのミックス型授業が行われました。この状況に対応するために、全ての授業で配信が可能となるようマルチメディア機器を整備し、全ての教室から全ての学生を対象とした授業が可能となりました。大学として、またメディアセンターとして完全ではない部分もあったかと思えますが、2020年からの2年間、なんとか教育活動を続けることができました。

2012年度から4年計画で進められたV-Campus 5th Stage (2012 - 2015) では、「誰もがいつでもどこでも教育を受けられる環境の構築をさらに進めること」を目標の一つとして挙げていました。これは2011年の東日本大震災での教訓を元に立てられた目標でした。それから約10年、この目的を実現するために、大学として、またメディアセンターとして着実に前に進んできたつもりでした。しかし、最近のコロナ禍での経験は、この目的の実現には「これをやれば良い」「あれを用意すればうまくいく」というものではなく、先を見据えた地道な基盤整備と新たに出てきた問題に臨機応変に対応する機動力の両方が必要であることを思い知らされました。この先の「アフターコロナ」における教育活動がどのようになるのかまだ見通すことは難しい状況ではありますが、これからも出てくるであろう様々な問題を解決しながら常に前進していかなければならないことは確かだろうと思っています。

大学における情報基盤の充実を進めさらに良い環境を作っていくためには、ユーザーで

ある学生・教職員からの「文句」「ダメ出し」が必要不可欠です。ユーザー一人一人の声が結局は自分にとって使い勝手の良い環境の構築に役立ちます。今後とも様々な形でのメディアセンターへのご協力をお願いいたします。